

だ。空は灰色に曇つて、雲は飛び大雨沛然として來らんするの光景である。武歩堂々兵舎に入る。又愉快な晝食。午後は又雨で演習はない。羽をのばす時だ。僕等の所の兵は大部やかましい色々な事に吐言を云ふ。堅パンをかちつてゐる者、新聞を讀んでゐるもの、ベッドの上でふざけて叱られてゐるもの、娯樂室へ行つて戦記を讀んだり、將棋をさしたり。……充分遊んだ。あちらの室からも笑聲の爆發を起す、今迄鬱積した遊びの發散だ。

外はくらくら雨は降りしきつた。夕食の時刻が來た。雑談の花を咲かせながら終り、明日の除隊を思ひながら封筒型のベッドにもぐりこんだ。平和の夜がおとづれ、コト／＼と不寢番の足音が單調さを破るのを聞きながら遙か家庭の夢を見た。

縣下中等學校聯合演習記

門川三郎
上松信一

秋將に酣ならんとする九月二十八、二十九兩日にわたる縣

下男子中等學校聯合演習は、湖西饜庭野原頭に於て開かれたり。本演習は縣知事之を統監し、軍隊側より大砲、機關銃、飛行機等の出動を受け、これに参加せし學生は無慮二千餘人實に壯大なるものなりき。

我等四、五年生二百餘人は二十八日午前六時校庭に集合し彈藥の分配を受け、午前八時彦根長曾根波止場に向ふ。此所にて京阪丸に乗り込み、今津に向ふ。八中、彦工、彦商、神商等の若き戰士らも同乗せり。

約二時間の後我等の船は堂々と今津港に入港。直に上陸隊伍を整へて、所定集合地蘭生に向つて若狭街道を前進したり日は眞上に輝き、頭に焼けるが如き暑さをなげかけ、汗はシヤツを通り上衣を通り、はては背囊にまでもにじみ込む。これらの苦しさをもとせず、約二時間歩武堂々と行進を續けた。やがて蘭生に到着、北軍の編成に入り第一大隊本部のあるとある寺院に背囊銃器を下し、中食を取れり。各々汗にてぬれシヤツ上衣を乾し、熱き麥湯に咽喉をうるほし充分休息を取れり。暫時の後大隊長より本日の遭遇戦の想定其の他を聽く。要は次の如し。

一、我北軍ハ、本日午後三時頃饜庭野ノ中央湧リニ於テ敵トノ遭遇ヲ豫想シ、此ノ地點マデ前進セ

リ。

一、北軍第一大隊ハ、北軍ノ枝隊トシテ、本軍ノ攻撃前進ヲ容易ナラシムル爲前衛ニ出サレタリ。

一、第一大隊第一中隊(五年生)ハ尖兵中隊トス。

一、狀況開始ハ午後二時。

一、斥候或ハ其他特別ノ任務ヲ持ツ者ハ、午後一時

三十分今津三軒屋ヲ連ヌル線ヲ、前進スルヲ得

一、飛行機ハ敵機ト見ル可シ。

午後一時半、約五名の斥候出さる。午後二時集合し、先づ先兵中隊前進を起す。暫らくの後、續いて第二、第三中隊も前進を起す。後方より續々他の部隊が續く。暫時にして、險しき山道にさしかゝる、此所も勇往邁進の意氣を以て進む。やつと、頂上來れりと思ふ時、前方には我等の獨占舞臺秋の饜庭野が開け居るを見る。敵はと見れば未だ一人も之を認めず。野に下りてなほも前進を續くること約二十分、時に山の端より爆音勇しく飛來する敵機ありと見る間に、突然後方より大隊長飛び來りて、前方の谷を占領し其所にて樹木を利用し停止する事を命令す。直に谷を占領し其所に停止して、戦機の熟するを待てり。先程飛來したる敵機は我等を認めたるか、我頭上に来ると見る間に、爆彈を二三投下し悠々と

飛び去れり。約二十分の後、前方に砲聲を聞くと大隊長の射

撃命令下れり。それより中隊長小隊長と次第に命令は傳り、我等は散解し愈々前方に點々と姿を現せる敵に、射撃を開始せり。忽にして左右にも盛に砲銃聲起る。我軍は全線敵に對して猛烈なる射撃を開始せるなり。敵もこれに應戦せり。ドォーンビュン／＼／＼ダツ、／＼／＼ダツ、／＼／＼、有らゆる音が氣味悪く耳にひびく、正に一大修羅場を現出せり……彼我愈々接近するに従ひ第二線部隊即ち援隊は、全線に互間増加され、戦は益々激烈となれり。敵は愈々接近せり……「突撃に『前へ!』走れり／＼遮二無二銃口に白刃をひらめかし……」突込め!「ワァーッ」ワァッ」／＼／＼」さけべり／＼、咽喉もさげよと、時しもひびく休戦ラツバに我大隊は集合の後三軒屋方向に退却。

四時半頃三軒屋に到着せる我大隊は、各々飯盒に米を入れ小川の少い水をそゞぎて、トラツクにて運ばれたる炭をおこし、これにかく。暫時待つうちに飯は出來たり。折しも東天にかゝれる月を賞しながら熱い飯に舌鼓をうつ、色々の事を話しつゝ集合命令を待てり。

十時集合命令下る。直に集合夜襲の豫行を二三回やり、十一時愈々我大隊は夜襲の途につけり。我等は唯黙々として大

隊長の合圖するがまゝに、或は臥せ、或は進む。途中にて約一時間程停止せり。敵状を探らんがためなり。各方面に斥候が張りめぐらされ、敵の歩哨線にかゝれりと思はるゝ銃聲が、二三聞ゆるのみ。これらの斥候の報告により、略々敵状を知りたる我大隊は、直に前進を起せり。敵は我軍の近づくを知りてか、突然數多の照明弾を打ちあげ、我に射撃を開始せり。我等はこれをさけつゝ、敵陣に愈々近接せり。大隊長は機を見て突撃を合圖せり。唯無言の儘突入せり。左方には未だ射撃を続け居るか。時々機關銃の發射の音と共に聞ゆかくて夜襲を終へ、再び後方に退く。時正に二時、三時まで休息す。或はうとうととする者もあり。夕食の時分配されしパンにかじりつく、三時。大隊長の命により、陣地を占領し敵の來るを待つ。約五名の斥候を出し、夜襲する敵の兵力其の他を調査せしめ、且つ數多の歩哨を出し、警戒に務めたり四時頃斥候歸り大隊長に何事か報告す。かくする中に我歩哨の誰何する聲に續く銃聲を聞く歩哨は本隊に敵襲を知らすためはげしく射撃せり。よりて、直に歩哨を本隊にかへし、暗を前進せる敵に射撃を開始せり。射撃益々猛烈となる。敵は愈々近づき突撃を始めぬ。我これに應ず。……休戦となれり。時正に四時半。

第二日

拂曉戦には大分間がある。宵の月も雲にかくれ、廣い饗庭野もぼんやりとしてうすら寒い風が、時々顔をなでて行く。マントを背囊から下して、くるまる。大隊旗と一緒に置いてある堤灯の火も赤い。ぼそぼそとつぶやく聲が聞える。多くの者が一緒に背中合せに、かたまつて居眠る。ごろごろ寢ころんでゐる者もある。あだかも滿洲の曠野の感がする。家も見えない。火も見えない。一面見わたすかぎりうすぐらい草原、やがてふるへながらマントを巻いて、再び背囊につけた今にしてかの零下二十餘度の滿洲の野に於て、奮闘して居て下さる方々を考へれば九月二十八日、まだ夏のほとぼりも冷めぬ時に、寒い何んのは實に勿体ない。少しく寒かつた露のおいた草の上を進んで、拂曉戦の位置についた。まだ暗い、露の上に折敷けしてじつと、待つてゐた。今度も第一戦になりたいな。晝の愉快な遭遇戦を思つた知らぬ間に、こくり居眠つた。ふと氣が附くと、すべての者が居眠つてゐるらしい。長い間じつとしてゐた。ごくわづか東か西か知らぬがうすあくなつた「立てつ」愈々戦闘かやれやれと思つたら、「まはれ右つ」おやおやと思つてゐると「斜に右へ進めつ」わけがわからぬが命令だからとどんどん下つた。

やがて、草の露も向ふの山もはつきり分つて來た。間もなく止つて、愈々疎開隊形をとつた。知事閣下や、其他の方々が、馬で走つて通りすぎられた。元氣がみちみちて自らの心の緊張を覺える。今夜は完全な明け、少し曇つて、日光は見えない、前進。又前進。向ふの岡にも、こちらの凹地にも野原にも勇しまく、進む、大和男子の意氣が見えた。益々意氣ふるひ、元氣加はる。更に躍進又躍進。之より少し以前より「ごうん。ごうん」と野砲の音が響きわたる。白い石灰がびゆつゝ、びゆつゝと上る。廣い一面の野原に、今や實戦氣分が滿ち滿ちた。大隊長の馬の姿にも心がおどる。火線構成。命令は、次から次へと勇しくひびきわたる。さあ、之から射撃だ。はるか、かなたより、チーつと、向ふの方まで一列に散兵戦が連なる。敵の塹壕より、盛んに小銃の音が聞える。うちたたくて、撃ちたたくて、心がむづむづする。やがて「目標！」と聞えて來る。それ今だ。六百——。うてつ——號令が終るか終らぬに、氣の早いものが「ビューンとやる」秋の空に心よく、ひびきわたる、つゞいて、一面に、氣持のよいしかも勇ましい小銃の響が起る「馳足——前へ——」走る。轟き硝煙の香。やがて敵の塹壕の前にある鐵條網を切りに行く兵が走つて出る。益々敵に近づく。愈々はげしく撃

つ。身方の者の鐵條網を切るのを容易ならしめるため煙幕を引く。褐色の煙が或は白色の煙が低く地面をはふ。身方より敵が却て見えない。一種の臭氣がぶーんと鼻をつく。間もなく「突撃——進め……」突込め——「うわ——つと、敵の陣地に躍り込む。勇氣が、元氣が、意氣がほどばしる。遮二無二に走る。飛ぶ。……「状況終り——」之で、演習は終りである。又面白く、愉快に又えらかつたが、之より朝食直ちに閱團の隊形。知事閣下初め軍部の人々、學務部長等の人々が馬でしづしづと通られる。緊張した氣分で、分列式。伊香農の音楽隊が觀兵式行進曲を奏す。一層彦中の名譽のため、心がしまる。ついで講評。此の頃より意地悪い雨がしとしと降り出した。講評は一番後で、はつきり聞えない。姿は見えない。講評が終つて、砲兵の實彈射撃があつた。雨の中をマントを着て、聊かおどろきながら、その教練を見る。「ずとーん」ごろ／＼がら／＼と轟き、腹の奥底へずしーんと來る。ぱつと白煙と土とが遙か、かなたにたつ、マントを透して雨がだん／＼しみこんで來る。見學を終へて愈々饗庭野より、今津町へ向ふ。雨でぐしやぐしやになつた赤土の道を、丘こえ、原こえ一里許り雨の中を歩く。マントを透した雨は、更に洋服を透し、シャツに及ぶズボンにはびつた

り、肌にくつつく。此の演習中最も苦しい時であつた。靴は水でグチャ／＼する。弱い話だが、二日間の疲れと冷たさでしやべる元氣もなくなる。だが皆んなの勢でびちやびちや歩く。漸く人家が見え曇つた湖が見えた時は、かすかな元氣と勇氣とが出て來た。波止場に着いた時、やれ／＼と思つたら一層冷さが感ぜられた。併し私達はよい教訓を得たよい經驗を得た。之でこそ始めて在滿將士の苦しさが、幾分なりとも了解することが出来る。之も今から思へば愉快な學生時代の思出の一つとなるだらう。やがて船中の人となり、十二時過ぎて、彦根の棧橋に再び足をおろし、校門をくぐつた。

(六、一二、二四)



母校の諸君へ

卒業生 淺島 希一

早や初雪がちらついて學年も又段々終りに近づきましたね

そして本誌が諸君の手に渡る頃は進級、卒業の三月です。即ち僕等が卒業して一年になる頃です。

何時も通信が少いと雑誌部の諸君が言はれるやうですから此の一年を殆ど無爲に過して來た僕として甚だ僣越な次第ですが、此の一文を送る事にしました。讀みづらい點もありませうが、兎に角讀んで頂きたい。

尚僕は去年旗手をしてゐた眼鏡を掛けた男です。顔を知つて名を知らない人の爲に附け加へて置きます。併し決して自己宣傳なんていふ意味ではありませんよ。

扱て在學中の思ひ出話を一寸……

僕が中學へ入つたのが大正十五年の年——殆ど何ら期待する所なく受験したのです。両親も先生方も入學出来るなんて少しも考へてゐなかつたわけです。當時は百三十人募集に對して二百三十名程志願者があつたので、近頃生徒の爭奪をやつてゐるのを思へば嘘の様です。

當時居られた先生で今も居られるのは藤下先生と書記の大和田先生の唯二人。六年前の彦中と、その變り方はまことに驚く程です。小使さんまで變つてしまいました。

藤下先生に次で古い先生は居井先生ですが、それでも今の五年の諸君は先生の新任式を御存じの筈です。

き光榮でした。

在學中特筆すべきは雑誌「未醜」の刊行された事でした。三年の夏休から始まつて約一年續きましたが、後が續かなかつたのは残念です。主任の目加田、北村君等が入學試験の準備に忙がしくなり、雑誌の編輯の方へ手が廻らず遂に十ヶ月足らずで何時とはなく中止してしまつたわけで、後繼者も殆ど集まらず僕等一代で終つたのも遺憾です、又諸君の間にもかゝる雑誌が刊行されてゐるかも知れませんが、出來得べくば長らく續きたいものです。それには先生方の御後援をお願いするのがよからうと思ひます。

相互の友情を深める爲、團結を強固ならしめる爲、情操を養ふ爲雑誌の發行は非常に有意義な事です。

次に卒業後の消息を一寸。

松田、笠井兩先生の御努力で假に彦根稅務署へ假に入ることになつたのが四月十五日でした。それから八月十三日まで約四ヶ月わたわけです。

去年の卒業生尾崎君等と共に入つて、共に出たのです。署では昭和二年度の卒業生北村愛吉さんも居られました。土地賃賃價格に依る地租課税といふ國家的大事業の一部を擔當したのですが、其の間は署員一同緊張の連續でした。朝七時半

點は極めて辛い先生で、甲等さう餘計無かつたやうです。問題も多くて僕などいくら損したか分りません。併し講義は聞いて解り易いものでした。

もう一人村野先生があります。當時彦中に於て先生程變つた人、そして人格者はありませんでした。見榮を張つたり、えらさうな顔をする事が大きらひで、縁の下の力持と云つた人でした。憂國の人で僕等の指導には人一倍努力されました。授業をそちのけにして、一時間中辯舌を振はれた事がいくらかあつたか知れませんが。話に豫定といふものはありませんから、思ひつくまゝに何時間でもしやべられたが、その言々句々僕等の血となり肉とならざるものはなかつたのです。時にはその言はれる事が矛盾したり、變に聞える事もありました。が、よく考へて見ると全然反對の言ではなかつたやうです。外遊された事があるので大勢を見るの能あり、よく昔國を出て全國に雄飛した近江商人は、現代となつては日本を出て世界を市場として活躍すべし」といはれ、彦根の兒玉一造氏を賞揚されて居りました。學校の實際教育、勤勞教育等について大いに抱負を持つて居られました。

昭和四年六月五日に大阪城東練兵場に行はれた御親閲は僕等の中學在學中最も榮ある出來事で、帝國青年として此上な

歸り七時、正味十一時間労働だったので。

此の期間中は僕にとつて最も意義のある生活でした。實社會へ出た最初に於て此の緊張した生活を味つて、將來益する所大であつたらうと思ひます。

八月十三日解雇後志を得ず今まで遊んで居りますが、是非何處かへ就職したいとは思つてゐるんです。

氣分轉換の爲此處で文体を變へます。

九月二十五日稅務署時代の同僚と北廻琵琶湖一周自轉車旅行の途に上つた。自轉車に乗り馴れず、遠乗といつては松原水泳場迄しか行つた事のない僕にとつて、正に破天荒の壯舉であつたが、幾多の艱難を突破して無事二十七日夕五時歸還し得た。最初二日間の豫定で一氣に大溝或は堅田迄行く積りだつたのが湖北伊香郡に於て岩熊坂の險に難澁し、饅頭坂に阻まれて遂に第一日は海津泊り、翌日大津まで行つて二日目に歸彦した。

岩熊坂は佐和山より高い山だつたが、之を自轉車を押して越えた。その時の苦難、疲勞——それは想像以上である。

大浦から海津へは海岸の道を知らず、一途に饅頭坂を越さんとして其の不能なるを知り、遂に八時間の滯留の後夜半汽船で海津へ渡つた。其の爲一周旅行に一寸瑕がいつた形だ。

大浦發つの時大事な借物——母校の飯盒——を一個忘れて

來て海津へ着いてから思ひ出し、大いに心配したものだ。その心配なのは鹽津附近から降り出した雨が夜に入つて大雨となり明日もやみさうにない事だつた。併し幸ひ翌朝はれたのでほつとした。が前夜の心配は實に想像以上だつた。

第一夜は大浦と海津の太湖汽船待合所に、第二夜は大津驛に寝た。特に寒い夜で板の腰掛の上にマントにくるまつて寝た。横になつても寒くてちつとも寝られない。かういふ時思ひ出すのは去年の聯合演習の夜の露營であり、想像するのはかのルンペンの生活だつた。そして之が又尊い經驗でもあつた。

大溝と大津で飯盒炊事をした。大津では場所を探すのが大變だつた。大浦で忘れた爲大溝では一個で炊いた。

僕等が難儀した岩熊坂や大浦海津間にはやがてトンネルがうがたれ道路が敷かれて、琵琶湖一周も何なく出来るやうになるであらう。僕はその日の一日も早からむ事をいのつてゐる。併し今の内に難儀して廻つて見るのも面白からう。五六人隊を組んで諸君も來年の夏休や春休に廻つて見られては如何……ゆつくり附近をたづねて行くのなら徒歩旅行がよい。之なら一週間以上かゝるだらう。ついでに京都へよつても

よい。僕等もよるつもりだつたが、時間がなくおぢやんにな

之に就て諸先生方にお願したい事がある。即ち伊吹登山、

永源寺、長命寺、太郎坊さん詣で、琵琶湖一周、河内風穴探險、京近傍巡り、敦賀訪問、養老行、遠泳、スキー等の壯舉を學校主催でやつて戴いたらと思ふのである。前記の旅行は自轉車又は徒歩を原則とし、希望者のみとすべきである。

野外演習もよからうが、かうした旅行の方が餘程身心の鍛鍊になるだらうと思ふ。之は僕の在學中からの考へであつたが、言ふを憚つてゐたのだ。

是等の旅行は希望者だけだし、大部分歩いたり自轉車で行くのだから學校側としては費用は殆どかゝらない。マラソン競争もよいが賞品を出さねばならず、全生徒出場だから不平が多い。

次に望みたいことは辯論部及蹴球部の設置と、野球、水泳雄辯大會の開催である。雄辯の立身上必要な事は今更云ふまでもない。その辯論を養成すべき辯論部も雄辯大會もないといふ事は古い歴史を有する彦中にとつてまことに遺憾千萬と云はねばならぬ。僕等が一年生の時雄辯大會があつたきり。其後どうした事か開かれずに終つた。松田先生といふ大先生

がおいでになり、古川君等の大雄辯家を擁する彦中は今少し全國辯論界に雄飛してもよい筈である。

若き血に燃ゆる諸君は刻下の大問題たる滿洲事變で支那側の不誠意に憤慨おく能はざるものがあらう。其の憤怒を吐露して全世界の人々に日本の正義の立場を知らしむべきである。雄辯の力は強い。巴里に於ける日本代表部に雄辯が無かつたならば、その形勢は今日どうなつてゐたか知れぬ。

新時代に生きんとすれば先づ雄辯人とならねばならぬ。雄辯は人なり——之れ僕が辯論部の設置を叫ぶ所以である。

世には往々にしてスポーツ及スポーツ選手に對して誤られたる觀念を以てゐる者がある。が、併し之は一部の選手のみを見て全体を論じた言であつて、之あだかも群盲が象を評する圖の如きもので全く取るに足らぬ偏見である。

僕はスポーツを以て心身鍛鍊の鍵だと信じてゐる。故に前記運動部の増設を望み校内大會の開催を願ふものである。

蹴球は今や非常な勢を以て全國に行はれつゝあり、將來野球と共にスポーツ界の王座を占むべき競技である。古き歴史を持つ彦中だ。蹴球部の設置は新年度に於て當然なすべき事である。

校内大會は從來庭球、短艇、武道、陸上が行はれてゐるが

之に野球、水泳は當然入るべき筋合のものである。即ち野球はスポーツ界の大關であり、彦中運動部中の古顔で光輝ある歴史を持つてゐる。水泳は今最も充實した部で縣下有数の强者であるからだ。

此の外全生徒の必入部制、角力部の復活、プール設置、之は運動部ではないが生徒自治會の設置等何れも望ましいものである。

しかし此れ以上に望ましいものは意氣である。僕自身も在學中は意氣がなかつたが、一般に滋賀縣の青年は意氣に乏しいと云はれる。彦中の諸君にしてもさうだ。併しさういはいれながら黙つてゐるのは男ではない。諸君！一つ意氣をふるひ起して他府縣の青年を其の膝下に屈服させて見ようではないか。

それに就いて僕は一つの抱負を持つてゐる。そして諸君に意氣あらば僕の考へに共鳴して、之を後援してもらひたい。

それは海外發展だ。先程書いた如く村野先生は「今の近江商人は世界を相手に活躍すべきだ」と云はれた。移住と貿易とは一寸違ふが何れにしても之程男子として愉快な事はなからう。行先は？

アマゾンだ。僕はかう思つてゐる。今の日本は支那を膺懲

して滿洲へ積極的に進出するか、ブラジルへ移住するかしなければ國內總ての問題はいつまで経つても解決出来ない。そして又將來世界に君臨すべき國家はアマゾンの地に最も早く勢力を扶植した國家だと。

何故？そのわけはいくらかもある。併し今此處で述べるには残念ながら紙数が足りない。故にアマゾンについては彦根圖書館にある「神秘境大アマゾンを探ねて」を讀んでその正体をよく研究して戴きたい「世界地理風俗大系」も参考になる。

(因に同書は館外借出しが出来る)

アマゾンへ行く途は東京にある國士館高等拓植學校へ一年入學しそれから一同そろつて行くのが最もよい。校長は現職相秘書、前代議士上塚司氏。必ず寄宿舎へ入るを要し、最初の一年間約三百圓。渡航準備費百八十圓。渡航後更に一年アマゾニア産業研究所附屬實業練兵所へ入る。その授業料百二十圓。二ヶ年を通じて六百圓位である。

渡航船賃等は政府全額補助である。尙詳しい事は東京市外世田ヶ谷町松陰祠畔の學校へ問合せられたい。

色んな事をくどくどしく述べたが、もうこゝらで終るとしよう。御讀了を感謝す。では親愛なる諸君よ！さやうなら。



部 報

陸上大運動會記

小野 威 材

吾等の待ちに待ちたる運動會は來た。前日の十月十六日は午前中授業で午後一時頃より全校職員生徒は各々手分して諸準備に取りかゝつた。そして午後三時半頃には諸準備は終り清浄された運動場に引かれたる數條の白線は、秋光に映え明日の晴の運動會に赤鬼健兒の勇躍を待つのみとなつた。十七日早曉より天候は一變して雨降りとなり午前九時まで天候の回復を待つたが、止みそうにないので不得已十八日に延期することになつた。

| | |
|---|--------------------------------------|
| 十八日は朝來快晴無風にして昨日の雨でトラックのコンディションよく、絶好の運動日和であつた。午前八時全員校庭に集合開會式を挙げられる。足立會長より開會を宣し訓示を與へらる。國歌合唱、終つて全校生の中等部聯盟合同体操により愈々演技の幕は切つて落され、左のプログラムの順序により演技は演ぜられた。 | 6 四年 百 米 |
| I 全校生徒(休) | 7 一年 (個) 二人三脚 |
| 2 二年 百 米 | 8 三年 (團) ウェーピングチャンピオン |
| 3 一年 (團) メジシンボール | 9 各學年 八百 米 |
| 4 三年 二百 米 | 10 三年 (個) 一人一脚 |
| 5 二年 (個) 抽 籤 | 11 一年 百 米 |
| | 12 二年 (團) ドリブルボール |
| | 13 四、五年 二百 米 |
| | 14 一年 (教) 手 旗 |
| | 15 三年 百 米 |
| | 16 四年 (個) ハンギンレース |
| | 本年の新奇な種目、本物のハンギンに髣髴たるものがあり、調子を亂して顛倒し |

たり、その歩き方の滑稽なのに抱腹哄笑するものあり。

- 17各學年 四百米
- 18一年 (團) スローアンドキヤッチボール
- 19五年 百 米
- 20三年 (個) 變脚競走
- 21四年 (團) 棒 倒 し

肉彈相搏つ白兵戦は實に勇壯なものであつた。

- 22一、二年 二百米
- 23四年 (個) 背面疾走
- 24三年 (團) 騎 馬 戦
- 25各學年 千五百米
- 26一、二、三年 組別選手 八百米繼走
- 27二年 (個) 樽 廻 し
- 28三年 (教) 徒手中隊教練

観衆は抱腹絶倒す。身体のバランスを失ひ後轉するもの多く

よく訓練されたる動作、見事な出来栄え

であつた。

- 29校友會各部選手 八百米繼走
- 午前中の演技は正午終り約卅分間休憩。
- 晝 食
- 午後は零時三十分よりラヂオ体操より開始さる。

- 30全校生徒(体) 國民保險体操(ラヂオ体操)
- 高聲着音器のレコードに奏するラヂオ体操伴奏曲其二の妙なるリズムに合せて全校七百の健兒の一舉一動は整々確一に實演されて、實に見事な出来栄であつた。
- 31一年 (個) 輪 廻 し
- 32二年 (團) 轉廻置換競争
- 33五年 (個) ハンギンレース
- 34各學年 一 萬 米
- 35四、五年 低 障 碍
- 36有志 (体) タンプリング

- 第一で宙轉等の妙技、次々に輕業師の如く洗練されたる放れ業に観衆は膽をひやし、拍手喝采。
- 37四、五年組別選手 八百米繼走
- 優勝旗返還式
- 38尋常科選手 四百米豫選
- 39高等科選手 八百米繼走豫選
- 40有志 倒立歩行
- 41三年 (個) 背面疾走
- 42四、五年 (個) 障 碍 物
- 43尋常科選手 四百米繼走決勝
- 44高等科選手 八百米繼走決勝
- 45中等學校選手 八百米繼走決勝
- 46組別各學年選手 八百米繼走
- 47來賓及卒業生 競 技
- 48職員 競 技
- 49四年 (教) 中隊教練
- 50五年 (教) 戰團教練

當日の演技の掉尾を飾る戰團教練は本會最大の呼物で、攻防兩軍に分れ、攻撃軍

が運動場の西端より散開し(防禦軍は東

端寄宿舎の扉の前に散開)漸次肉迫する様は實戦を髣髴たらしめ、彼我の銃聲天地に轟き渡り、愈々肉迫したれば、一齊に喊聲勇しく、突撃を敢行し、一舉に敵陣を撃破する白兵戦は實に壯快であつた。観衆は一時啞然として居つた。

51全校生徒 (教) 分 列 式
規律正しく歩武堂々と元氣に滿ちた分列は實に嚴肅なものであつた。

分列式終つて後其のまゝ朝會体形に整列を終るや優勝旗授與式あり、會長の閉會辭について兩陛下萬歳、彦中萬歳を三唱。

観衆は年と共に増加し、無慮數千を數へさしも廣き校庭も観衆にて充され、係員は案内や場内整理に困難を感じたが幸にも何等の事故もなく午後四時頃盛會裏に閉會を告げた。

他校選手繼走の結果左の如し。
小學校選手繼走は参加校尋常科一三校高等科一〇校の多數にして豫選を行ふ。

尋常科四百米繼走豫選

- A組 一着 稻村小學校 一分一秒九
- 二着 龜山小學校 一分二秒五
- 三着 川瀬小學校
- B組 一着 彦根西小學校 一分
- 二着 葉枝見小學校 一分〇秒五
- 三着 西黒田小學校

尋常科の四百米繼走決勝は豫選に入選の右の六校の間に行はれ葉枝見小學校優勝し優勝旗を授與さる。

尋常科四百米繼走決勝

- 一着 葉枝見小學校 一分〇秒三
- 二着 彦根西小學校
- 三着 龜山小學校

高等科八百米繼走豫選

- A組 一着 西黒田小學校 一分五八秒八
- 二着 彦根小學校 一分五九秒
- B組 一着 柏原小學校 二分一秒一
- 二着 日撫小學校 二分一秒二

れ彦根小學校優勝し優勝旗を授與さる。

- 高等科八百米繼走決勝
- 一着 彦根小學校 一分五九秒四
- 二着 西黒田小學校
- 三着 柏原小學校

中等學校八百米繼走は本年優勝盃を新調のため参加申込校は近府縣中等學校の勇滋賀師範を始め八商、長商、彦商、膳中、彦工の六校なりしも當日雨天にて十八日に延期のためか棄權多く八商も第二選手を派遣せしため師範も好敵手なく決勝は滋賀、彦商、八商の三校にて行はれ二着との差三〇米にて競走にならず滋賀師範優勝し最初の優勝盃の保持校となる。

- 一分四二秒八 (本會並びに於本運動場新記録)
- 一着 滋賀師範
- 二着 彦根商業 一分四八秒二
- 三着 八幡商業
- 各學年對級八百米繼走の結果左の如し。
- 一年 一着 三組チーム 一分五九秒九

| | | | | |
|--------|---------|---------|---------|---------|
| 3-4-5- | 4 中村 一郎 | 11.14.0 | 3 大橋 義造 | 11.14.0 |
| | | | 4 柴田 正巳 | 11.14.0 |

備考 ◎低障碍は百米にしてスタートより第一障碍まで二〇米、各障碍間二〇米とし障碍を四個置く。
◎一萬米とはトラックを一周し裏門を出て、京橋を渡り舊郡役所前を右に曲り女學校前を通り岸川に出で岸川堤を上り中岸橋を渡り
後三條、平田、福満小學校、西今を経て大上川橋上に至る往復を云ふ。

本校陸上運動會陸上競技記録保持者 (自昭和三年至昭和六年)

◎記録保持者

| 種目 | 學年 | 姓 | 名 | 本年度記録 | 年度 | 學年 | 姓 | 名 | 從來記録 |
|------|----|--------|---|----------|----|----|--------|---|--------|
| 百米 | 三年 | ◎那須原邦男 | | 一二秒二(新) | 四 | 五年 | 前川伊太郎 | | 一二秒四 |
| 二百米 | 五年 | ◎古川傳三郎 | | 二六秒八(新) | 四 | 五年 | 西堀新次 | | 二七秒 |
| 四百米 | 四年 | 室谷隆一 | | 一分三秒二 | 四 | 四年 | ◎澤田平三郎 | | 一分二秒 |
| 八百米 | 四年 | 柴田禮二 | | 二分三秒三 | 五 | 四年 | ◎澤田平三郎 | | 二分二秒六 |
| 千五百米 | 五年 | ◎中村義造 | | 五分一秒二(新) | 五 | 五年 | 久喜川二造 | | 五分二秒二 |
| 一萬米 | 三年 | 大橋宗三郎 | | 四分二秒三 | 五 | 四年 | ◎中村一郎 | | 四一分一四秒 |
| 低障碍 | 五年 | ◎古川傳三郎 | | 一五秒(新) | 五 | 五年 | 西馬場元悞 | | 一六秒 |

運動靴又は跣足にして、スパイク靴を使用せず。

本年度陸上運動會に於て陸上種目につき記録優秀なる左記十三名の者に各新聞社より寄贈の賞牌を授與せり。

一年 岡島 正延
二年 辻川 龍太郎
三年 北川 恒雄
西川 寛一
那須原 邦男

第四回明治節長距離競走の記

十一月三日明治節拜賀式終了後本校体育デの催として恒例に依り全校生徒の第四回長距離競走を行ふ。當日快晴にして絶好の運動日和にして午前九時二十五分全校生徒運動服裝に身を固め朝會体形に集合約五分間の準備運動をなし第二部午前九時三十五分號報合圖に元氣よく出發せれより十分遅れて一部出發一名の落伍者もなく午前十一時盛會裡に閉會式を行った。翌朝左記入賞者に賞品賞狀を授與せり。

一部(三、四、五年)

| | | | |
|-------------|--------|-----|----------|
| 一着 五年 中村 一郎 | 四五分四五秒 | 二〇〇 | 三年 藤本 孫信 |
| 二着 四年 柴田 正巳 | 四六分五五秒 | 二二〇 | 五年 島田 正男 |
| 三着 四年 北澤 重雄 | 四七分九秒 | 二三〇 | 三年 井口 敏彦 |
| 四着 三年 元持 善衛 | | 二四〇 | 四年 佐野 年久 |
| 五着 〇 | | 二五〇 | 四年 西垣 正勝 |
| 六着 〇 | | 二六〇 | 四年 松山 薫 |
| 七着 〇 | | 二七〇 | 四年 西村平次郎 |

八着 四年 西河徳三郎
九着 〇 新谷 又平
一〇着 五年 上田羊治郎
一一着 三年 安部 信之
一二着 〇 森 彌一郎
一三着 〇 田中 宗一
一四着 五年 藤本 善雄
一五着 四年 里中 力精
一六着 〇 山本 源一
一七着 三年 岡野 真雄
一八着 四年 多林 慶藏
一九着 五年 宮川 浩三
二〇着 〇 藤本 孫信

かくて諸先生の御指導にて生徒役員の活動と生徒の自治的、規律統制ある行動によつて豫定のプログラムは順調に進行し、運動會終了後の後片附も職員生徒の協同動作により秩序整然と誠に気持ちよく約三十分間で全部後片附を終つた。

終始一貫して實に立派な運動會であつたとを確信する。小學校選手競技の組合せ等で豫定より約三十分程遅れたのは遺憾であつた。生徒諸君の自覺により益々理想に向つて精進し度ひものである。

| | | | |
|-------------|--------|-----|----------|
| 一着 五年 中村 一郎 | 四五分四五秒 | 二〇〇 | 三年 藤本 孫信 |
| 二着 四年 柴田 正巳 | 四六分五五秒 | 二二〇 | 五年 島田 正男 |
| 三着 四年 北澤 重雄 | 四七分九秒 | 二三〇 | 三年 井口 敏彦 |
| 四着 三年 元持 善衛 | | 二四〇 | 四年 佐野 年久 |
| 五着 〇 | | 二五〇 | 四年 西垣 正勝 |
| 六着 〇 | | 二六〇 | 四年 松山 薫 |
| 七着 〇 | | 二七〇 | 四年 西村平次郎 |

を倒し副將松本上田を倒さんと善戦したが、之を敗りこの勢を以て敵の大將園部をも一氣に屠らうと努めたが、其効なく遂に我は敗戦の將となつた。

併し此の試合で我等は十分自信を持つ事が出来た。そして日一日と練習の度は増した。

明治神宮全國中等學校劍道大會滋賀縣下第一次豫選大會出場の記

我等は大津武徳會支部に到着した。皆んな元氣だ。それが心強く感ぜられた。本日宮下の病氣は大いにいた手であつた。併し併し我々は勢ぞろいをして大いに敵を威壓した。幾萬の敵現はるゝとも唯一太刀にと、けつ氣にはやる新銳の若劍士達！

會場は緊張してゐる。神殿味の内に開會の幕は落ちた。

第一回戦 彦商 彦中

河部 加藤
○ 西村 川
○ 赤松 門
○ 西村 山
○ 西川 本
○ 西川 水
○ 西川 野

我軍の氣勢物すごく、山本の奮闘目覚しく日頃の手並は發揮されて行く。

此所ぞ赤鬼魂！
愛校心のヒラメキ！

如何なる敵來るとも我おそれず、此所に湖北の雄虎中と戦ふことゝなつた。

第二回戦 虎中 彦中
○ 北川 加藤
○ 北川 藤
○ 西川 門
○ 西川 川

西川 山本
○ 大久保 川
○ 田附 川
○ 西島 川
○ 水野 川
○ 水野 川

此の我軍の勢を見よ、破竹の勢を！

第三回戦(次決勝戦)
今中 彦中
○ 井上 加藤
○ 前田 山本
○ 中島 水野
○ 古川 上田
○ 古川 田

我等は益々此の機に乗じ榮冠を獲得せんものと一大決心のもとに相手を待った。

第四回戦(優勝戦)

八商 彦中
○ 木村 加藤
○ 喜田 川
○ 馬場 山本
○ 田中 水野
○ 小野 上田

嗚呼我等は遂に敗れたり、上田奮闘すれども及ばず、此の惜敗を見られよ、最後の一息だった。

我々は此所に益々練習を成し最後迄耐へ得る力を養成せんことを六百の健兒に約す。許せこの敗戦を。

第三十二回青年演武大會出場の記

四方の山々が萌黄絨の鐵着て琵琶の鏡に姿を寫し初むる頃、櫻花影をひそめ嫩緑地上を彩る時、劍道部部員の練習は青年演武會を目前に控へ、更に熱を加へ技を上げ初夏と名のつく候も過ぎ綠陰濃く地上を蔽ふ時我等が意氣は極度に達した。

一年の昔涙を呑んで勝を第二岡山中學に譲り、武徳殿を後にした敗戦の姿を思へば焉んぞ便々として此大會を迎ふるを得んや。されば見よ此陣容を、殊に四年生諸選士の目覺しき上達を！雪辱の時来た！かくて我等は天を衝くの意氣と自信に溢れる腕を以て全國青年劍士の檜舞台武徳殿に駒を進めた。時に七月廿四日諸先生及び柔道部諸選士の激励の辭に送られて彦根驛頭を京都に向つた。

七月廿五日 第三十二回青年演武會の序幕は切つて落された。會長の辭は嵐の前の静けさについて晝なほ暗い殿堂に響き渡り、我等が士氣はいやが上にも向上した。左に當日の戦績を記さう。

- 1(本)校 校 大野玉和夫
 - 2(本)校 校 加藤伊太郎
 - 3(本)校 校 大川三景
 - 4(本)校 校 水野正信
 - 5(本)校 校 山石忠義
 - 6(本)校 校 上田啓三
 - 7(本)校 校 水野拾雄
- 廿六日 遂に来た！遂に来た！我等が雪辱の日は来た！！年來の宿志を遂げんものと思ひなれたる具足をまとい互に鼓舞しつゝ會場の門をくゞる。雲霞の如く詰めかけた全國幾千の戦客は各々決心の色を面に表はして所狭しと頑張つてゐる。我が敵や何處に？赤鬼魂を發揮すべき時は遂に来た。我が敵は兵庫伊丹中學だ。嗚呼心地よ敵來し、嗚呼心持よや戦はん。

第一回戦績左の如し

| | |
|----|--------|
| 本校 | 兵庫伊丹中學 |
| 先鋒 | 宮下○田中 |
| 加藤 | ○藤井 |
| 山本 | ○田谷 |
| 水野 | ○市田 |
| 大將 | 上田○松浦 |

先鋒宮下立上るやパツとさがつて陣をとる敵之に乗じて進むを此處ぞさばかり籠手に突進危く外れて再び睨み合ひとなる。此の時總裁梨本宮殿下の御台臨あり、試合暫時中止、再び立ち上るや猛然と飛び込んで胴を切る。

次いで次將加藤斜右に退いて敵をおびき寄せんとす。敵之につられてヅリ／＼と二三歩攻寄る、何處にか隙ありけん敵突然面に飛び來る、加藤ハツシと掃つてかへす刃で面へ一面あり。

中堅山本立ち上るやハツタと敵を睨みつけ、玄々妙々秘術を盡して戦へども、敵ののし來りし面を防ぎかれて敗る。

續く水野小兵なれども腕に自信あり、隙あらば飛び込まんものぞ虎視耽々敵は五尺七八寸もあらうかと思はれる大兵、太刀風鋭く切つてかゝる憂々相撃ちパツと離れたかと思へば復じりじりツと詰め寄つて將に面に伸びんとす、間髪を容れず水野流星の如く飛び込んで籠手を制す。美事なる籠手其所えは人を感歎せしめた。彼獨特の姿勢を以て寸隙も與へずする／＼と攻め寄る大將上田、寄つては離れ離れては又寄るパツと離れたかと思れば再び陣容を整へ目にも止まらぬ速さを以て胴に猛進「胴ッ」「胴アリッ」

噫！勝てり我勝てり、敗れし敵は慰め合ふ言葉も忘れて出て行つた思はず感謝の涙がほどばしる。

第二回戦は同じく兵庫の瀧川中學だ、此意氣を以て一氣に打破らん時を待つ。

籠手を外して面を切るか、近寄つて胴を抜くか？我等が期待は今や次將の上にある。敵は血走つた眼をつり上げてぢり／＼と我が次將に攻め寄る。その血相さながら闘手の如く悪戦苦闘試合は一分さ長びき加藤の一撃今か今か待つ間……兇刃突進！敵の刃先伸びるさ見るや我が加藤の籠手を打つ、嗚呼悲惨加藤涙を呑んで退く。

中堅山本奮然として立つ。颯と一歩退いて正眼に構へ敵の手許を狙ふ。敵も初段の豪者、頑さ構へて動かす、ヒクツと山本の足が動いた。すわツと一同息を呑む。時……雷撃一閃ビュツと空を切つてうなつた手練の一太刀物の美事に敵の胴に見舞つた。

| | |
|----|-------|
| 先鋒 | 宮下○奥村 |
| 加藤 | ○山本 |
| 山本 | ○才原 |
| 水野 | ○中濱 |
| 大將 | 上田○瀧瀬 |

我先づ飛び込んで面を切る。次將加藤惡戦苦闘よく戦ひしが、遂に面を取られて退く。瀧川山本ぐい／＼敵を威壓し追ひ詰め追ひ詰め躍り上つて面を切る、敵啞然として退く。次いで副將水野も亦美事な面を取つて退く。大將上田電光一閃彼得意の面だ、面！面！！面！！我再び凱歌を擧ぐ。

此の戦や我が軍の意氣完全に敵を呑み戦はずして勝つた概ありき。かくて我等は來るべき第三回戦への英氣を養ふべく道々當日の戦況を語りつゝ宿に引き擧げた。此の日大いに雨降る。

明くれば廿七日、青葉道に名残りを留めて雨は何處へか去り雲間にはみ出だせる青空

噫！「二對二」勝敗は此の一戦に決するのだ。上田の心中や察するに餘りあり。骸子は投げられた。上田床を蹴つて立ち上るや敵將をハツタと睨み斜正眼に構へてす／＼と攻め寄る、敵もさる者パツと引き退つて隙を狙ふ。虎視耽々敵將何と思つたカツツツと進みパツと振りかぶるや飛鳥の如く面に向つて飛び來る。應！と見れば上田グツと体をかどめてあざやかな抜胴！バチツと大きな音がして敵の体はトン／＼と前へのめつてゐる。ハツと敵味方汗を握る。然るに何たる皮肉ぞ……打ちが緊らなかつたのか審判は「うゝむ……」さうなつたきり試合は續けられた。

は今日の酷暑を物語つてゐる。前日の疲れもすつかり消えて新なる勢力に満ち／＼と我等五名は希望に溢るゝ胸をそびやかして三度武徳殿の門をくゞつた。四分の一に減じた戦客は各處に廣い空地を作つてゐる。

第三回戦は福岡縣の筑紫中學、初段そろひの猛者だ「戦はう／＼」互に勵ましつゝ道場に入る。

| | |
|----|-------|
| 本校 | 筑紫中學 |
| 先鋒 | 宮下○中村 |
| 加藤 | ○松居 |
| 山本 | ○鶴田 |
| 水野 | ○藤村 |
| 大將 | 上田○藤野 |

「いざ……」口の中で氣合を入れてヌツクと立ち上つた、先鋒宮下寄らば切るぞの意氣すさまじく敵の體に隙を狙ふ。またんにパツと煙の如く伸び來つた敵の刃ハツシと掃つて颯と後り體を立て直すや早く飛び込んで胴を切

忽ち陽忽ち陰輕快乍の如き副將水野翩翩として敵に迫る。敵忽然手負獅子の如くあばれ出し滅多打に打ち來る我が水野よく之に應戦し、攻撃し面を斬れども手も定まらず遂に敵の打ち出す籠手を防ぎかれて退く。

中堅山本奮然として立つ。颯と一歩退いて正眼に構へ敵の手許を狙ふ。敵も初段の豪者、頑さ構へて動かす、ヒクツと山本の足が動いた。すわツと一同息を呑む。時……雷撃一閃ビュツと空を切つてうなつた手練の一太刀物の美事に敵の胴に見舞つた。

再びもこの位置にかへつて立ち向ふ兩將、驍將上田顔面蒼白決心の色其の面に瞭然たり敵將おどるさ見るや猛虎の如く籠手に突進し來る。上田之を外して鏝ざり合ひさなる。本校の運命は此の一瞬に托されてゐるのだ。兩將の眼と眼がカチツと合つて火花を散らす。

あッ！其の時上田引き退りざまビシリと打つた見事な退り面だ！此の上田如何しかん軽かりしか緊らざりしか之亦一本ならずして終つた「もこへ歸つて」審判の聲兩人分れてもこの位置に歸る。

敵將藤野我が上田の立止るを見ますやバツと飛び來つて籠手を切る、上田之に應ずれども及ばず……嗚呼萬事休す。水野上田の奮闘もその効を奏せず此處に勝を筑紫中學に譲るは、悲惨なりし此の最後！

夕陽金の尾をひいて比叡の峯に沈む頃、微風に頬をあふらせて校門を出てし猛練習の日鏘然として響き渡る鐘の音を聞きつゝ腕を磨きしこゝ幾月幾歳ぞ、此も夢、彼も夢、今こなりては總べて過去の夢だ。併し我等には前途あり、必ずや來るべき縣下中等學校武道大會には優勝せんものと悲壯なる覺悟を決めて京洛の巷を後にした。

滋賀縣教育會主催
第十六回縣下中等學校劍道大會出場の記

眞剣なる土用稽古に引續き九月以來の猛練習、我等が腕はいやが上にも上達した。願れば部創立以來振はざりし劍道部……敗戦に重ぬるに敗戦、恨み骨髓に徹し無念く……叫びつゝ斯に十有餘年、湖國の猛者何者ぞ……白鞘げつと拂へば六百の赤鬼健兒が恨みの刃打ち止める猛者有るならば受け止めて見よ、時方に秋の半ば十月十一日、志賀の都大津商業道場に於て我等が恨みを晴らす時が來た。彦中若者の血は逆流し、日は坐り打ち下す刃は確實に……。

長濱商業 本校
先田附 ○宮下
中島 ○門川
川瀬 ○山本
小倉 ○水野

大前田 ○上田
○點 —— 五點
縣下十七校を第一回戦に於て既に制して意氣揚々として第二回戦を待ち受けた。

第二回戦
虎姫中學 本校
先北川 ○宮下
西川 ○門川
大久保 ○山本
田附 ○水野
大西島 ○上田
一點 —— 四點

先鋒宮下の奮闘効なく敵に先手を打たれた併し續く門川物凄く切つて、切りまくり西川を倒し此れに元氣を得て山本、水野、上田も瞬く間に切つて捨て四點を加へ第一位は失はず。

第三回戦
八日市中學 本校
先森本 ○宮下

森 ○門川
山梶 ○山本
川口 ○水野
大須原 ○上田
三點 —— 二點

先鋒宮下第二回戦の雪辱を決して鋭く切り込む刃も馴いられず、再び涙をのむ。次將門川全勝の勢を以て宮下の復讐を志せど成らず中堅山本前二人の恨みを返へさんと打込む切先鋭く續く、水野もものの美事に勝ち同點となる。大將上田猛然と打つて掛れども効なく涙を呑む。然れども依然として第一位は譲らず。

第四回戦
彦根商業 本校
先阿部 ○宮下
赤松 ○門川
脇田 ○山本
西村 ○水野
大西村 ○上田

三點 —— 二點

先鋒宮下二回の敗戦を最後に晴らさんとする刃は確實に……次將門川前の敗戦此度こそはさ戦へども再び……中堅山本全勝の勢を以て一刀の下に……副將水野も亦全勝の勢を以て縦横に切つて掛れど無念……再び同點となる、大將上田打ち來たれば退き退ぞけば打つ……噫！此の一戦こそ我等が運命を定めるものだ……。

彦根工業 本校
先山口 ○宮下

決勝戦
我等は後半の敗戦に皆の意氣少なからず損じたけれど互に慰めつゝ道場に入った。志賀の都大津にも早や夕日が輝きつつある時決勝戦の幕は切つて落された。

後藤 ○門川
秦 ○山本
杉本 ○水野
大辻 ○上田
四點 —— 一點

宮下、門川、山本、水野續いて倒れ、残る大將上田、四人の恨みを返さんと打ち込んだ面！復讐の刃は確實に……一刃の下に切り伏せた。併し縣下の覇は他校に奪はれた。噫！我等は敵陣まで切り込んで倒れた。此の恨！此の恨！復讐を計るに殘る六百有餘の彦中赤鬼健兒だぞ、振へそして進め。

彦根高等商業學校主催
近府縣中等學校劍道大會出場の記

秋中十月二十五日最後の試合が來た。最後の試合だ！おゝ！我等が實を結ぶ時が來た無念！其れは相手でもなければ病魔でもない。それは、時期だ！試験直前！されど

其の様な事で退くか！試験が何んだ！我が校の名譽並びに我が部の歴史の爲に戦ふのだ我等愛校の赤血燃ゆる若者の振り上げる刃の下に進む者は無いのだ………されど其れが最も悲惨な、そして最も残念な敗戦だつたのだ！それは何所に原因が有つたのか？我等の急激なる進歩に確實なる基礎が作られてゐなかつたのか？立派なる實を結ばんとして掛つた此の試合に於て、斯くも風雨の爲に散り落ちたる花の如き哀れな最後となつた事は返すくも無念だ。左に敗戦を記す。

第一回戦

岐阜商業 本校
先 ○早 川 水 野
○ 門 川
○ 山 本
○ 池 場
○ 上 田
○ 大 野
○ 富 下

福 田
大 山 田

◆ 告 ぐ

我が部は部員三十名の多数を有し、彦中最大の部である。部員各位は各々愛校心に燃ゆる者にして、金龜城下彦中七百の健兒の第一線の者なり。日々練習を重ね其の劍聲道場を揺がしてゐる。我が部は日輪の昇るが如き勢を以て進み、今や縣を制し京津の覇を目ざし奮闘してゐる。おゝ！彦中健兒よ彦中の歴史の爲に譽の爲に一人でも多く部に加はり盡されん事を切に希望致します。

我等が部は、眞面目な練習と部の秩序を維持され、彦中の歴史の爲に振はれる健兒ならば如何に多数に成らうともかまはないのであり、却つて喜ぶ所であります。

(宮下・上田記)

柔道部々報

部員 近藤 國藏 記

部長 笠井 先生
理事 村山 先生
部員

五年 村川 文男 近藤 國藏
四年 山口 隆爾 大西 三郎
三年 柴田 正巳
二年 西島 輝雄 辻川 龍太郎
那須 流源

西山の雪解くるにいたらず、餘寒未だ去らざるも、我等が意氣は勃々として抑ふる能はず、寒さに恐るゝ者を嘲笑しつゝ意氣軒昂、寒を冒してこゝに稽古を開始せり。柔道着の

冷たさも氷の如き疊の冷たさも物かは、意氣物凄く肉彈相搏ち氣勢場内に漲る。牙を磨く虎豹の如く、ひたすら腕を磨き彦商、彦工又高商にまで出掛けて試合度胸を定め、以て時機到來を鶴首して待ちたり。

第三二回青年演武大會出場之記

七月二十七日、遂に我等の腕を試すべき第一回の時は來たれり。そは京都武徳殿にて開かれし大會なり。彦中健兒の熱誠ある應援と諸先生方の熱烈なる激勵の辭とを受け必勝の意氣高く彦根驛に集合す。遙かに仰ぎ見れば七月の燃ゆるが如き太陽に歴史ある金龜城は燦然として輝き緑なす樹々に照り映へて恰も我等を勵ますが如し。車窓よりプラツトフォームに見送る我が同志を見れば、悲壯の決意敢て云はざれども各選士の面に表はれたり。明くれば二十八日、個人試合の日なり。日頃より腕に覺えのある武者共は各々其の腕前

を示さんと全國より集りたる者數百名、ひし／＼と武徳殿に詰めよせたり。我等嚴冬炎夏を物ともせず鍛へに鍛へし赤鬼健兒の腕の牙えを示すは此の時と各々ベストを盡して闘ひたり。

二十八日個人試合成績

東の方組合也
四八回 本 神港中學 ×(大) 西 三 一郎
西の方組合也
二一回 本 京都市校 ○(島) 本 繁 三

七八回 本 富田林中 ○(三) 輪 久 左衛門 徹
七九回 本 青島日本中 ○(大) 上 田 敏 雄
八〇回 本 大阪至心中 ○(橋) 本 末 藏
三三九 本 高知城東中 ○(山) 野 口 隆 爾
三四六 本 福岡中 ×(渡) 村 邊 川 壽 彦 男
二十九日団体試合の成績

第一回戦

本 校 兵庫尼ヶ崎中學
先鋒 橋本 末造 × 河野 大典
次鋒 島本 良三 × 中澤 肇
中堅 ○大西 三良 — 坂本 典雄
副將 ○村川 文男 — 北村 七五三夫
大將 ○山口 隆爾 初段 豊田 長正

斯くて力戰空しからず斷然好成绩を以て敵を一蹴し、意氣天をつくの勢なり。續いて第二回戦に向ふ。

第二回戦

本 校 青島日本中
先鋒 橋本 末造 ○大貝 晴雄
次鋒 島本 良三 ○田代 正文
中堅 大西 三良 × 北田 一夫
副將 村川 文男 ○富永 純正
大將 ○山口 隆爾 竹村 莊吾
嗚呼！我等は遂に敗れたり。あくまで敵を攻撃し之を打ち倒さんものと奇策に奇策を盡し全力を奮つて戦ひしも敵もさる者猛然た

る遊襲に逆襲を重ね選士の苦闘も遂に及ばず遂に敗れたり。されど我が御大山口君敢然敗戦の後を受けつぎながらも捨身の大業敵を苦しめ、天晴れ敵將の首を打ち取り我が軍を零敗の悲境よりまぬがれしめたる功や偉なり斯くて我々は血涙にむせびつゝも捲土重来を期して京洛を去れり。

縣下中等學校武道大會
出場の記

武徳殿に於ける敗退によりて、強く責任觀念を頭に刻み込まれた我等部員選手は、来るべき日の試合に備へんが爲に直に土用稽古に併せて新學期早々猛練習を開始した。我等は烈々たる母校愛に燃えてゐたのだ。そうして毎日／＼身体が碎けてしまふかとさへ思はれる血を吐くやうな猛練習を繼續したのだ。練習中に假死の状態に陥つたのも何度だつたらうか。膝頭や臂から血が母校愛の熱血がだら／＼と流れ出てゐたのも常の事

を黙々として去る敗者の姿。

あゝ、我等は敗れたのだ、敗れたのだ。完全に期待は裏切られてしまつたのだ。それは餘りにも悲しい結果ではないか。

夏から秋へかけて毎日／＼の苦しかった練習の報酬が今日の結果だと、あゝ我等は泣くにも泣けなかつたのだ。悲しい心が胸にとち込めて、拂つても／＼すぐ一ぱいになつた然し、頭を垂れて悄然と歩み去る我等の心には、今日の試合の光景よりも、又其の悲しい結果よりも、もつと單的でもつと激しいものが我等の心を占めてゐたのだ。そればたゞ一途にあれ程に熱心に聲援して下さつた諸兄に對して濟まないといふ激しい感情だつた。若人の熱血の迷るやうなあの推戴式のあの時の光景が、まざ／＼と目に映つた。さうして涙は又さめどもなく溢れ出るばかりだつた。「屹度勝つて来いよ」と叫んでくれた六百の諸兄にごうして此のまゝで顔を向けられやうか。どうしておめ／＼と歸つて行かれやうか

だつた。玉なす汗が眼に沁み込んで、開けてゐる事も出来なかつた。そうして此の涙ぐましい練習の間に大會の日は愈々迫りつゝあつたのだ。我等は少なからず身体強壯となり、業も立派になつて其の日の来るのを鶴首して待つた。

十月十一日、我等が練り鍛へた技倆を現すべき當日がやつて来たのだ。諸兄や先生方々多數の御見送りと激励の辞を受けて、我等は大津の會場に向つた。車中に於ても、宿に着いても、寝に就く前になつてもまだ見ぬ敵の話ばかりしてゐた。明日の試合を夢に描いて目醒むれば既に試合の當日であつた。天限なく晴れて心身爽快、意氣揚々と會場に到着。

第一次戦
本 校 滋賀師範
先鋒 島 本 — 出 口(初段)
次鋒 岡 野 — 川 端(初段)
中堅 大 西 — 岡 本(初段)

副將 橋 本 — 西 村(初段)
大將 山 口 × 横 山(二段)
第二次戦
本 校 虎姫中學
先鋒 島 本 — 永 田
岡 野 — 速 水
大 西 — 山 田
橋 本 — 大 村
大將 山 口 × 堤 (初段)
第三次戦
本 校 彦根商業
先鋒 島 本 — 西 田
岡 野 × 若 林
大 西 × 江 畑
橋 本 × 藤 本
山 口 × 堀

彼等は我等の立派な結果を齎す事待つてゐるだらうに。我等は躊躇しました。

しかし、我等は歸らねばならなかつた。口惜しい涙を後に残して……………。

諸兄よ、我等の心を察し給へ。敗れた者の悲しさと、苦しさと、口惜しさは到底經驗なしには測り知り難いものだ。之を知るものはたゞ我等と彦中魂で一つに結ばれた諸兄あるのみ。

終りに臨んで、我等が諸兄の熱烈なる御後援と期待に背いた事に對して、只管御宥恕を請ふ次第であります。

第八回近府縣中等學校
柔道大會

昭和六年九月二十四日彦根高商に於て開かれし武道大會に出場せり。秋季皇靈祭の當日は空高く晴れ上がり、前年の優勝校平安中學を初とし、京商等の近府の猛者連は早くも高商道場に馳せ集りぬ。十時試合は開かれたり

第一次戦
本 校 神崎商業
先鋒 村川 文男 × 北川 一雄
次鋒 島本 真三 × 藤野 三郎
中堅 大西 三真 辻 公平
〇〇 國領 輝一
副將 〇山口 隆爾 〇北川 榮一
大將 橋本 末造 〇
第二次戦
本 校 大垣商業
先鋒 村川 文男 〇長谷川 健吉 先鋒
次鋒 島本 真三 × 同
中堅 大西 三真 〇名倉英一郎 次鋒
副將 〇山口 隆爾 同
同 〇牧村 良夫 中堅
大將 〇橋本 末造 同
同 〇大橋 實雄 副將
同 高木 次郎 大將
斯くて我等は第一次戦に勝ちしも、隣縣大

垣商業に敗れたり。

行幸記念武道大會の記

十一月十三日、この日こそ 大正天皇の行幸あらせられし日にして、我が校永久の誇且名譽とするの日なり。我等はこの日を記念せんが爲に式後大本營跡の拜觀を許されし後、例年の通り當日一日を費して校内武道大會を開催す。選手はいづれも元氣で戦ひ接戦に續く接戦なり。以て大いに若人の意氣を揚ぐ。終に最後の榮冠は五年の一組へ!!。

左に當日の成績を述べん。

三、四、五年對級採點試合

第一回戦

四ノ三——〇三ノ一

第二回戦

三ノ三——〇五ノ二

四ノ二——〇五ノ一

三ノ二——〇五ノ三

四ノ一——〇三ノ一

第三回戦

五ノ二——〇五ノ一

五ノ三——〇三ノ一

優勝戦

〇五ノ一——三ノ一

第一回戦

四ノ三——三ノ一

先鋒 林 茂二郎 × 岡見 正靖

吉川 實乘 × 百々 尙三

北森 末吉 —— 〇朽木 徳房

藤實 正憲 —— 〇丸岡 芳之

國島 惠瑞 × 尾原 宗乘

毛利 宗次 —— 〇森 彌一郎

上林 茂 × 佐野 年久

〇竹内 禪真 —— 藤本 當雄

副將 〇北村 利一 —— 橋本 末藏

大將 夏川文二郎 × 上田 敏夫

優勝候補たる三年の一組先づ四ノ三に勝つ。

第二回戦

三ノ三——五ノ二

先鋒 桂 敏三 —— 〇古川傳三郎

〇三輪久左衛門 —— 久保虎太郎

清水 修 —— 〇上田羊治郎

田澤 清一 × 川脇 秀一

鳥山 真三 × 近藤 國藏

堀部 久光 —— 〇林 正二

古澤 —— 〇清水 光一

田中 一男 —— 〇上池賢次郎

副將 〇岡野 真雄 —— 木下 茂

大將 〇河合 芳章 —— 三輪 隆造

三年ノ三、奮戦して退く。

四ノ二——五ノ一

先鋒 小谷 薫 × 塚原 和夫

松井 敬三 —— 〇西澤 芳三

錦織 恭三 × 高畑 捨一

田中宗男記 —— 〇飯島 三郎

〇布施 一男 —— 西村 修

西村平次郎 × 戸下 善朗

〇大西 三郎 —— 中島善太郎

里中 力精 —— 〇山内 喜一

副將 〇山口 隆爾 —— 北村 茂男

大將 安田 晋平 —— 〇加藤 黙英

優勝候補の一つたる四ノ二、大接戦を演じたりしが、加藤の攻撃功を奏し凱歌五ノ一に上る。四ノ二涙を飲んで退く。

三ノ二——五ノ三

先鋒 大橋 義造 × 清水 正義

秋山 米造 × 近藤謙次郎

〇大照 豊 —— 藤本 善雄

深田 太郎 —— 〇喜久川二造

上田 隆治 —— 〇集治 重信

大森 徳三 —— 〇西澤 正三

辻 威雄 —— 〇村川 文男

金子 裕 × 巖佐 正三

副將 渡邊 弘 × 堤 登良雄

大將 志賀谷重藏 —— 〇北村 安彌

五ノ三奮戦ものすごく、三ノ二全然問題まならず。

四ノ一——三ノ一

先鋒 北川 善明 —— 〇岡見 正靖

速水常太郎 × 百々 尙三

〇和田 善一 —— 朽木 徳房

青山喜久藏 × 丸岡 芳之

〇久木彌惣八 —— 尾原 宗乘

柴田 正巳 × 森 彌一郎

福田 見領 —— 〇三上三右衛門

副將 若林茂三郎 —— 〇橋本 末藏

大將 辻村彌太郎 —— 〇上田 敏夫

流石に優勝候補の貫祿を示し、三ノ一ゆう／＼と勝。四ノ一力戦せるも及ばず。

第三回戦

五ノ二——五ノ一

先鋒 〇古川傳三郎 —— 塚原 和夫

久保虎太郎 —— 〇西澤 芳三

上田羊治郎 × 高畑 捨一

川脇 秀一 —— 〇飯島 三郎

〇近藤 國藏 —— 西村 修

林 正二 × 戸下 善朗

清水 光一 —— 〇中島善太郎

上池賢次郎 × 山内 喜一

副將 木下 茂 × 北村 茂男

大將 三輪 隆造 —— 〇加藤 黙英

優勝候補同志さて終始接戦なりしも、一組終に名を成す。

五ノ三——三ノ一

先鋒 清水 正義 —— 〇岡見 正靖

舟崎 —— 〇百々 尙三

藤本 善雄 × 朽木 徳房

喜久川二造 —— 〇丸岡 芳之

集治 重信 × 尾原 宗乘

〇西澤 正三 —— 森 彌一郎

村川 文男 × 三上三右衛門

巖佐 正三 × 藤本 富男

副將 堤 登良雄 —— 〇橋本 末造

大將 北村 安彌 —— 〇上田 敏夫

三ノ一又意外にも五ノ三に堂々と勝を占め観る者をして感歎せしむ。

優勝戦

五ノ一——三ノ一

先鋒 塚原 和夫 × 岡見 正靖
 ○西澤 芳三 — 百々 尙三
 高畑 捨一 × 朽木 徳房
 飯島 三郎 × 丸岡 芳之
 ○西村 修 — 尾原 宗乘
 戸下 善朗 — ○森 彌一郎
 ○中島善太郎 — 三上三右衛門
 山内 喜一 — ○藤本 富男
 副將 北村 茂男 × 橋本 末造
 大將 加藤 黙英 × 上田 敏夫
 三ノ一善戦せしが、終に五ノ一の爲に破らる。

団体試合中にて最も観客を緊張せしめし好試合にして終に五ノ一優勝す。

二年紅白試合(今年は一年試合なし)
 紅軍 白軍
 先鋒 吉田 正雄 — ○瀨理 大仁
 塚越 康雄 × 同
 西村 正作 — ○藤田 浩二
 竹村 正士 × 同

有川 堅二 — ○植野 甚三
 太田 通 — ○同
 ○太田 元夫 — 同
 ○同 — 清水 秀岳
 ○同 — 渡邊 良夫
 ○同 — 小林 毅
 同 × 吉田 龍雄
 田中卷太郎 × 森 嘉重
 相馬 次磨 — ○廣瀬 雅三
 近野 豊一 — ○同
 ○北野 顯龍 — 同
 同 × 垣見 章三
 ○田中 泰藏 — 三尾 圓照
 同 — ○吉田 庄一
 猪口 治男 — ○同
 森 康雄 — ○同
 富田 信二 — ○同
 武田 信京 — ○同
 芝原 眞治 — ○同
 筑摩 堯 — ○同

山田 敏雄 × 同
 森山 清治 × 鳥井
 堀 曉男 × 多留 眞信
 ○杉本 浩 — 中辻 政造
 ○同 — 小林 龍男
 ○同 — 森中 展三
 同 — ○高橋 巖三
 北坂 宗男 — ○同
 ○赤田 竜三 — 同
 ○同 — 田中 從三
 同 — ○寺村 新藏
 ○那須 流源 — 同
 同 — ○外村 桂三
 ○西川 寛一 — 同
 同 × 村岡 秀男
 ○西島 輝夫 — 深井 料一
 ○同 — 石橋 靖弘
 同 × 辻川龍太郎
 () 田中太一郎
 ○上池 芳三

柔道部後記

多大なる意氣と期待さを持つて進んで来た我等の跡も、今は思ひ出さなりました。而も此の思ひ出たるや頗る悲壯的なものであり、校友會諸君の期待に多く背いた事は甚だ遺憾であるけれども、吾等は吾が部の先輩諸兄の遺志を繼承し全力を盡して闘つて来たのであります。併しまだ部員も少く奮闘努力の効もなく此處に悄然と退かねばならぬと思ふ時、限りない淋しさを感じるのであります。幸ひにして今年數名の部員を得たことを喜ぶと共に、將來校友會諸君が更に目醒め、校友會の爲に又柔道部の爲に眞に武士道精神なるものを修得せんとする熱血健兒あらば速かに起て！ 來りて奮闘せよ。徒に無意義の中に青年時代を送るは男子の本懐ならず。我等の風等を雪ぎ、柔道部の繁榮を計るの士が多數出てくることは吾等の最も望む所であり、欣快とする所であります。最後に柔道部諸君の一層

の奮勵を望むと共に、益々榮はらんことを祈る次第であります。
 昭和六年十二月、柔道部卒業生

端艇部々報

| | |
|----|--------|
| 部長 | 佐藤 先生 |
| 理事 | 薄木 先生 |
| 委員 | 前田 先生 |
| 五年 | 北村 安彌 |
| | 加藤 黙英 |
| | 浦部 善三 |
| | 三輪 隆造 |
| 四年 | 久木 彌惣八 |
| | 加藤 秀夫 |
| | 綾戸 峻 |
| 三年 | 河合 芳章 |
| | 金子 裕 |

部員

主將 北村安彌

加藤 黙英、浦部 善三、岩崎 助一、三輪 隆造、三輪 久三、西田 亮三、久木 彌惣八、加藤 秀夫、林 茂二郎、綾戸 峻、河合 芳章、金子 裕、深田、松本、堀部、
 遼山の雪解け初める彌生の初め頃、春とは名ばかり、昨年度の重鎮且つ功勞者たる森野前主將を初め、西田、澤田、深尾、淺利、澤田の諸氏を送り出し、吾が部は北村、加藤、浦部の三氏他に部員なく、非常な痛手を受けて間もなく、吾が部に御盡力下されてその功勞深大なりし上月先生は御樂轉。吾が部切つての大打撃、佐藤先生と相談の結果、今は休暇中等施すべき方法なく、新學年を待つべしとの事、吾等三人は一日千秋の思ひにて新學年を待てり。然し新學年に入りて吾等は選手を募りしが、如何せん人員満たず、然しながら加藤、浦部兩氏は非常に御努力下された

新艇庫新築地鎮祭の記

四月十七日朝以來猛烈な雨降りて、今日は如何がと思はれた。午後漸く小雨となりぬ放課後吾が部は神官後閑氏を御願ひ申して地鎮祭を舉行せり。此の雨中学校友會長を始め、その他の諸先生の臨席を得て、吾等部員一同の喜びでありました。無事竣功を祈る爲め會員代表されて會長が、部を代表されて部長が選手より主將北村が代りて祈られたり。雨中を無事式を終れり。吾が部多年の宿望漸くその事業に着せる、部員一同喜び限りなし。吁嗟、愛艇の新艇庫の着手にと此の雨中を式に御列席下されし諸先生に厚く御禮申し上げます。

本校創立記念日端艇部主催

校内競漕大會之記

斯くて日は過ぎて未だにメンバーを得ず、遂に吾が校創立記念日の吉日を卜して端艇部

主催校内競漕大會を開催すべく準備の爲めにしばし編制を止む。

麗かな五月一日、風はそよそよと春陽は晴天高く輝き、櫻花爛漫として衆鳥和鳴し、人心陽蕩たる此の吉日、此の芽出度き日を祝すため、吾等六百の若人は、早くも午前八時彦根港灣埋立地に集合せり。春とは思はざるが如き紺青の空は、例年と異りて絶好のポート日和なりき。午前八時半吾が彦中創立記念日の式辭ありて後、直に本大會の開會辭ありて號砲一發大會の幕は切つて落されぬ。

殿かな祝砲は空高く轟き、水上には逞しき若人の競漕の力強さ、人の心を引き緊めずんば置かれず、此ぞ吾が日の本の海國男兒の意氣なり、且つ赤鬼健兒の精神の表れなりき。前半の普通レースに於けるカールの亂れも何時しか消えて、對區レースの舵手の聲水上に響く。又その艇進の心地良き響へんにもなると云ふか。校内運動各部の對部レースは物凄くタイムは武道部なりき。

斯くて職員レース行はれんとするや、學生時代に若返へられし先生方の手に手に意氣込まれて持たれる面白さ、おかしさ。

偕てスタートの號砲の響くや、一もなく二もなく力漕して我等は端艇王たらんとさるゝのか知られど、その滑稽さは人氣を呼べり。これぞ大會の興味たり。その他來賓レースに於ける先輩諸兄、或は他校の先生方は我が大會に一際的光辉を添へられぬ。

嗟呼、美しの戰哉。今は早や波上には聲なく、太陽は西山に傾きたりき。夕もや立ちこめる金龜城下の港灣に今日の大會の盛會を祝す如く響く時報と共に、天皇陛下萬歳を三唱して芽出度く本大會の幕は閉ぢられぬ。

校内大會終了後我が部は部長、理事、主將委員等と共に協議の結果下級生委員即ち四年三年の者から久木、綾戸、河合に西田を加へ昨年度の豪加藤、浦部、北村と一メンバーを作りぬ。斯くて編成せし上からは一致協力し

て一日も早く上達し、昨年の怨敵京一中を破

らすんば置かずこの勢に猛練習を開始しぬ。然し新人多くて練習も意の如く進まずとは云へ、熱心に努力し、困難に打ち勝ち、奉公團の關西競漕大會に出漕せんを努力せり。然るに修學旅行の爲めしばし練習中止して居り又此の大會は試験直前なれば棄權のやむなきに至りぬ。併し棄權せしかども何ぞ我等は他日を期して之を報いすんば置かずの意氣なりき。

彦根高等商業學校主催

近府縣中等學校競漕大會

之記

これより先、我が部は彦商の元持教諭をコーチとして積年の怨をばらし、我が漕艇會の霸王たらんと種々漕法を研究なしぬ。身は一葉の扁舟に寄せ、朝は始業前三十分は必ずバツク台にて練習を爲し、夕は太陽將に西山に没せんとする頃迄風雨を冒し、荒れ狂ふ琵琶

湖上の怒濤と戦ひぬ。

又も我が部は此處に諸君の期待されし浦部君は退學される事と定まり、故に當然我が部をも退部せられぬ。我等部員一同は止まる事を勧めしが、浦部君の決心堅く、且つ彼の未來の出世成功の爲め如何とも致し方なし。我が部は中堅たりし浦部君を亡び、部内は一時氣を落しぬ。引き續き部内は新にチーム編制して、新しき元氣を以て練習せんと先きの加藤、北村、久木、西田に新に三輪隆造、岩崎助一、三輪久三君とをシートに着けたりき。

昨年斯界の豪、京都一中の爲め彦根港灣に於て開かれし本大會に、夕霧立ちこめる最後の一戦に於て、僅かに二シートにて敗れぬ。涙を呑んで退きぬ。如何にして忘るゝを得ようか。何故この恥を報いなくておくものか。多年傳へられたる赤鬼魂を持つ健兒の意氣物凄し。

六月一日!! 一點の雲なき初夏の氣候、天候は絶好のコンディションに見舞はれ、我等

が意氣はいやが上に募る。午前八時我等一同學校に集合し、相手は何處ならむと會場に行きて問へば、湖南の勇者大津商業と顔を合す事なり。昨年の優勝校はと見れば、本年は優勝旗返還に來たれるのみ。何んぞ怨むるを得んや。

午前十一時半共にラシチに繋かれスタートへ着く。漕はひた／＼と我が艇をたゞく。準備完了す!! 嵐の前の静けさ! 一瞬! ドン!! 俄然火蓋は切られぬ。所が如何に。敵はスタートの江り出し長く早やくも我に三シート先んじたり。然れども我等はミドル主義にて急がすあせらず漕げり。突然我が舵手「ミドルへピー此處二十本」と呼びぬ。漕者は「ヨシッ」と應へぬ。俄かに我が艇は速力を出せり一本／＼敵に迫まれり。然るに練習日なほ淺く、昨日までの試験の爲め身心の疲勞がたゞりしか、ラストに入るや艇速鈍り、遂に一艇身半の差を以て我は敗れたり。

彦根中學 二コース 二着

大津商業 一コース 一着 三分十七秒
斯くて今年の本大會も敗れたり。我等の雪辱戰此の大會には實を結ばざりき。吁嗟、如何せん。他日三高の水上大會を期して退きぬ我が校友諸君並びに諸先輩諸兄の深甚なる御聲援を深く感謝し、併せて御寛恕を乞ふのみ因に出漕者左の如し。

舵手 西田亮三
整調 北村安彌
五番 久木彌惣八
四番 三輪隆造
三番 加藤默英
二番 岩崎助一
軸手 三輪久三

京都三高主催春季關西中等學校漕艇競漕大會出場之記

昭和六年度我が部最初の遠征なりき。稍々メンバー、並びにシートの異動を來たし、故加藤、北村の兩人は非常に努力せられて、此

等新人の練習を助け、且つ自身も猛練習をせられ、日一日と上達し行きぬ。而して艇速も速くなり行きぬ。

六月十四日午前七時三十分始めて征途に上りぬ。戰士は躍る腕を叩へて、彦根驛を西へ瀬田川會場へ向ひぬ。

本大會に出漕するは最初の参加にして、且つ岩崎、西田、久木、加藤、河合等の新人にて、剩へ經驗少き人なりしかば、部長以下選手一同種々作戦計畫をするに餘念なし。やがて瀬田川を渡り、石山驛に着きぬ。會場唐橋の石山側に來て見れば、早くも敵、奉公團第一、同じく第二、御影師範、大商、京一商、膳中は到着し居たりき。我等は元氣に満ちて必勝を期しぬ。河上靜かに煌々たる太陽は、晴れ渡る空より強き光を地上に投げつけて絶好のレース日和なり。午前十時昨年度の優勝校御影師範より優勝旗を返還しぬ。十時半抽籤を行はれし結果、我等は湖南の豪騰所中學と第一回戦に於て争ふことゝなれり。

整調 北村安彌
五番 久木彌惣八
四番 岩崎助一
三番 加藤默英
二番 加藤秀夫
一番 河合芳章

新艇庫竣功落成式舉行の記

六月十九日、先日來の雨は降り續き、未だに晴れず我等は部長殿に盛大に舉行されんことを願ひしが、本年財界の不況を顧り見て、非常に質素に行ふ事と致し、部内にて行へり多年我等が希望せし艇は既に出來上がり、今又斯くも立派な艇庫が事業着手以來二ヶ月有餘にして竣功し、落成致し、事は偏へに會長部長を始め、諸先生方の御盡力と校友會諸君の多大なる御援助に外ならないのであります。深く感謝に堪へない次第であります。厚く御禮申します。

當日會長其の他二三の先生の御出席を得て

小規模ではありしが落成式を舉行せり。部長開會の辭ありて會長よりの祝辭、並びに訓辭あり其の後端艇部を代表されて諸先生方に北村主將の謝辭ありき。我々部員が此の新築艇庫を眺めた時、誠に感激の涙が溢れて、感極りて何と御禮申そうや、相知れず。斯くて午後五時式を無事終了しぬ。

夏季練習之記

彦根高商の大會及び三高大會に於て端なくも敗られし我等は、最後の大會を待てり。時將に七月上旬の報來る。曰く、第二十九回京都帝國大學主催全國中等學校端艇競漕大會を八月二日大津石場ヶ濱にて開催す。此處に於て部長自からコーチとして出で、其く選手の練習を監督せり。果しなき湖上に東へ西へロングを引き、或時は半時間のロングに一舉多景島に到達し、炎熱甚しく天焼け水潤る中をも大會を想ひて一振／＼に身の總てを忘れて満身の力をオールに注ぎぬ。

此の時折悪しくも比良嵐は瀬田川の水面を吹きて、天候は益々險惡なりしが、意氣は彌が上に揚る。生か死か。去る高商の大會に敗れし以來、臥薪嘗膽して鍛へし此の赤鬼健兒の鐵腕、いざ示さん。午後零時半二艇は鐵橋下のブイに着きぬ。吁嗟其の瞬間、白煙一發二艇はスタートせり。一本／＼ゴールに突進しぬ。しばしは兩艇は相並びて進みしが、ミドル前に來るや、俄然我等の艇の進行は速に敵より一艇身を抜きぬ。然るに唐橋を通過せる時の急カーブと、強き一陣の風とに彼等が艇と又も相並びたり。此處ぞと我が舵手は「十本」呼びぬ。彼等は地の利を用ひて増々力漕せぬ。然しコースの長短如何とするもあははず、遂に敗れたり。許されよ校友會員諸君。遠大なりし御聲援を謝す。併せて先輩諸兄の御來援を感謝す。

因にメンバー左の如し。
舵手 西田亮三
マネジャー 三輪隆造

七月十七日部長理事諸先生と相謀り合宿する事になれり。斯くて清き歴史の漂へる滿々たる水と、東天高く聳ゆる金龜城を見渡して朝は東雲白む頃より、夕は月東山高くに登る頃まで續けぬ。日中の暑さを物ともせず流る汗を拭きながら又はしばし湖岸の青松の中で休みて、力強くも日増しに艇進の上るを見たるなり。單艇湖上を雨中物ともせず、縦横せるは實に涙がにじむのであつた。

斯くて七月も半過ぎ、暑中休暇も來りて校友は樂しき家庭に急げり。然れども我等には其れにも優る喜びあり。日毎愛艇を浮べ湖上で雄飛し以て檣舞台に立たんとする我等、赤銅の肌に赤鬼魂を宿し、涙と汗とにぬれまみれて、一日は暮れむとする時、我が懐かしの艇を艇庫に休めて、終日の勞を謝す。樂しき哉我等。幸にも練習中何等憂ひなく、來るべき晴の戰の日を待てり。

× × ×

全國中等學校優勝競漕
大會出漕之記

冷風は太湖に漣を起して我等七名の爲め祝福せむとするかの如く、絶好の練習日和を恵み、又或時は強雨を送つて我等に苦しみの経験と與へてくれたり。六月中旬以來の決死的練習は遂に七名の胸に必勝を期するの自信をほのめかせしなりき。七月二十八日、午後四時、大津の町に第一歩を踏みしめし時の我等選手之感……右には石場ヶ濱、左には根積れる比良、前方波上の彼方には我が懐しの彦根、見よ、五日の後には嘗て天下に轟きし名を再び我等が頭上に輝かさむものを……二歩三歩と踏みしむる時、涙は頬を傳ひて流れたり。これぞ感慨無量の涙なる。

四時半頃無事我等が合宿所佃亭に宿り、先づ天孫神社、即ち合宿所前の神社に参拜し武運長久を祈りぬ。

此の時湖上波たゞ又絶好のレース日和と云ふべし。突如、號砲一發三艇等しくスタートを切れり。右に今津を、左に大津商業を。三艇は同じ速さで進みぬ。突如、我がコックス「五百米通過」と叫びぬ。時に漕者時こそ來れど、一本／＼強引すれば我が艇は敵二艇をば壓して進みぬ。時に整調の聲は敵の勢力を壓して一同これに應じぬ。然るに如何なることぞや。九百米に三艇等しくトツプを並べたり。舵手は「ラストヘビー三十本」を叫びぬ。今や白熱戦を演じて観覧者の手に汗をにじませ、息苦しき、餘りの物凄さ云はむ方なし。突然、號砲は響けり。陸を見れば青たり。吁嗟、今津勝てり。我等三艇相前後してゴールに入りたるは瞬間的。天なる哉！命なる哉！日頃の實力を充分發揮し得ず。止みなん哉。

嗚呼、如何にせん、武運既に盡きたり。涙にもまれ、風に曝されてあらゆる辛苦を嘗めしも、哀れ一の谷の泡と消へぬ。想ふ、敗者

明くれば七月二十九日、大津に於ける練習の初日なり。練習は午前午後各々二回ありき朝のコンデイション良く、此の始めての日に於て善きタイムを得たり。我等選手七名は元氣に満ち／＼たり。

力は有り「八月二日乎、早く來れ」と天より聲せし如く思ひつゝ夜に入れば、身体を冷さぬ爲とて冬の身仕度にて床に就きぬ。斯くて爽かなる朝ともなれば、いち早く跳ね起きやがて朝稽古としてバック台に一通りの練習を済せて後、十本二十本と満身の力を込めてストラップの引き合ひを爲し、又或時は腕角力に餘念なし。

かくして三十、卅一日と過ぎ行く儘に練習を積み、八月一日は例年の如く出場選手の懇親會行はれ、一同列席せり。時に滋賀縣知事大津市長の祝辭、帝大總長、京帝大端艇部長の所感を述べられ、後委員の競漕に對する注意ありて番組の抽籤行はるや、満場の選手已が敵は何處と固唾を呑む。やゝありて我が敵

は現れたり。

第三回
大津商業 一コース
彦根中學 二コース
今津中學 三コース

縣下の中等學校とは如何に皮肉なるぞや。大津商業は今春高商の大會に敗れたる者、然りと雖も今春來長足の進歩をし、又今津中學は昨年關西の選手権を獲得せるものにして今や我等三校は中等學校の優勝候補のみ。我等は共に／＼堅く握りて破らんことを誓ひたり。

合宿所に歸りて部長以下選手一同策戦に幾時かを送りぬ。大會前夜なれば一同早く床に着きぬ。

明くれば八月二日、待ちに待ちし大會は來りぬ。天は曇りて暑からず、風も爽かなる朝には消えて後なし。早朝齋戒沐浴し合宿所前なる縣天孫神社に参拜後直に會場に行きぬ。斯くて三艇は曳船に依りスタートに着きぬ

去るに及び過去を顧みて

端艇部員 北村安彌

不肖、私が此の部報の一ページを借りて校友諸兄に御寛恕を乞ひ、併せて感謝を致します。

私が端艇部員として此處に計らずも不才なる身を以て重鎮となり、此の歴史上名譽ある端艇部を負つて立ちました。然も本年の痛手を受けた吾が部を、此の青二才なる私に何が出來得よう。然し若人の意氣と元氣に燃へて必ず一度は優勝せすに置くものと、然し意の如くならざるが此の浮世、來る大會も／＼敗れ又敗れ、何等功を奏せざるのみか、否！寧ろ汚名を附したるを何とぞ御許しを乞ふ。回顧すれば、私が部員となりしより以來、僅かに一度の優勝を得たのみにて、身に餘る優遇を受け、誠に感激に堪へない次第であります。本年又しても諸先生や校友諸兄の多大

の過言なるも、その者行く所さして敵なき稀世の大英雄ナポレオンも、武運盡きては如何せん。あはれ、孤城落日、湖上遙かに孤島の夕に消ゆる淡雪の命も待たで倒れたり。恨めしき哉。本年は一度も優勝するを得ず、此處に先輩諸氏や御來授下されし諸先生、並びに校友諸君の御寛恕を乞ひ、併せて身に餘る優遇を感謝す。

大津商業 一コース 二着
彦根中學 二コース 三着
今津中學 三コース 一着 四分五五秒

因に本大會出漕者左の如し。

舵手 西田亮三
整調 北村安彌
一番 久木彌惣八
二番 岩崎助一
三番 加藤英
四番 加藤秀夫
五番 河合榮一

(北村記)

なる御援助にて、斯くも立派な艇庫を新築し得たことは、我等部員一同の感喜と感謝とであります。

然し、敗者ながら四年以下の諸君に一言申します。運動部選手以外の諸君は稍もすれば選手と自分を別個の立場だと考へて居る傾向は有るまいか。諸君が選手は各自勝手に居ると云ふは、餘りに友情がなさざる。諸君何れの部といへども吾が校の代表ではあるまいか。且つ、吾が校友諸君が如何に運動に熱心なるかの表はれであります。校友の精神、意氣元氣其の儘が選手の態度に表はれるのであります。吾等五年生はやがて去り行くのです。運動各部の發展は諸君の意志にあるのです。吾が衰微せる吾が部には、名舵手西田君を重鎮として、久木、加藤、河合君等が有ります。期待せられよ、來る年をば。然し乞ふ。尙一層の御援助を賜らんことを。

最後に諸先生並びに校友諸兄の多大なる御援助に感激し、優遇に感謝す。併せて本年度

不良成績の御寛恕を乞ふ。

昭和六・十一・十五

以上

短艇を漕ぐ

久木

尊敬と好奇の念に迎へられて短艇に乗った。空は重苦しく濁つて海には小波がバタ／＼と岸を軽く打つ三十本程力漕した、とても調子が良い審判艇の差し出す綱へ繋留した續いてI中もD商も岸から應援船さから、應援の聲が錯綜して起る。

艇はずでに發足點についた。やがて用意の號令は宣せられた。一瞬！鋭き聽覺がうごめいた？自分の目には錯覺的のあるものが

私は一瞬「は、ま、ま、もうなるようになれ

一と

思つて目を瞑つた。

號砲一聲！

三つの艇は同時に波を蹴つた

味方の艇は非常に滑出しがよい

而し少しあせり、氣味だ

「ゆつくりと」自分は叫んだ

三百のボールも過ぎた。

味方の艇は悠々他を壓してゐる。

愈々ミツル・ヘヴィーだ

「ミツル・ヘヴィーあま三十」味方の舵手は

敵艇に先んじて絶叫した。

七百のボールも過ぎた

艇速はにぶつて來た。

自分は懸命に漕いだ………の、

嗚呼敵艇はグン／＼と我に迫つて來る

此の時稲妻の如くそうだ！彦中スピリット

だ！

そして晴れの今日を指指しての

苦き猛練習堅き決心

何の糞！！

整調もあせり出した。

私は再び「ゆつくり」と叫んだ。

D商の三番が大きなスブラツシユを擧げた。

よい、此の時！然し………

腕は機械的に動いてゐる。

オールはみだれ氣味だ

「ラストヘヴィーあと三十」コックスは叫んだ

後もう一分だ死んでも良いのだ。

否、僕は死んでゐただらう、然し只反動が

と一發の號砲天高く沖し、勝者を祝福しぬ。

漕ぐよりはむしろ流した……根盡きて私は

正しく誰も彼もが

ゴールに入つた

皆ばオールを流したそして艇内に身をこつと

伏せた

心臓の鼓動は今をしきりに動いてゐる

嗚呼、如何にせん武運既に盡きぬ今？

涙にもまれ、風に曝され、あらゆる辛苦を嘗

めし

一の谷と消えぬ

あの輕快な二番の冗談も

そして整調以下の堅き決心も

今は默念と湖上遙かに消えて行く

一九三一・八・二

歴史ある彦中ボート部の爲に

五年 岩崎 助一

親愛なる六百の健兒よあの汚ないガン部屋に華かなりし歴史を物語る數枚の寫眞、はた又輝かしき數本の大優勝旗を見て如何に感ぜられるか。過去の立派なる歴史を物語つてゐる。今もさうであるが、全國中等學校漕艇の王座を決す武徳會、及び其の後を継ぎし京大の全國大會最も華かなりし明治、大正を通じ唯血涙と意氣と努力による一中スピリットなる赤鬼魂をもつて我等が先輩は幾度か彼の榮

ある大優勝旗を擁し朝業の光榮に感激せし事か。彼の比叡の山に眞夏の太陽が西の空を赤く焼いて金波銀波に輝く三角波が逆巻く石場ヶ濱に戦勝の感激に疲勞も忘れて取圍く應援團の喜びの中に幾度か咽び泣きし事か。シャツが破ける帽子が飛ぶメガホンの雨、エールの叫び。我が一中は何時も脅威となり敵の畏服するものだった。その他我がボート部は到る處その威を逞うした。

就中向ヶ岡にそより立つ一高の全國大會に於ても群り來れる東北、北陸の強豪を征して隅田川原に凱歌を奏したのだ。

嗚呼熱血兒が饑腕撫てて立つ處敵は足下にひれ伏すのだ。諸君我等の先輩は全國に彦中あり矣血と意氣の赤鬼魂あり矣と唱はれ、長の傳統となり絶え間なく歴史を印せしを知らざるか。

かくて年改まり星霜移り……今年も私は若輩ながら此の歴史を汚すまじき戦友と共に琵琶の湖上に血と涙と汗によごれしユニホー